

---

**随 想****仕事と「出会い」において  
「ひと中心」を実現した人  
— 都 留 春 夫 先 生 —**

星野 命

都留春夫先生には、本年（1989年、平成元年）3月31日をもって1952年（昭和27年）以来37年にわたって勤めてこられました国際基督教大学を退職されることになりました。

先生は、当初国際基督教学園語学研修所において英語科助手としてお仕事を開始され、その後ICU英語学科専任講師、米国コロンビア大学院留学、そしてICUに復帰後は「カウンセリングと学生助育」担当の助教授となり、学生部長をも兼任されました。

教育研究所にかかわるようになったのは1959年7月に「学生指導問題研究セミナー」が開催された時以来で、このセミナーは当時の教育研究所長日高第四郎先生の絶大な支持の下で、コロンビア大学のティーチャーズカレッジからマックス・ワイズ博士を迎え、国内の諸大学の学長・教授、また文部省の協力を得て行われましたが、その準備と実行に当たったのが都留先生でした。（このセミナーの詳しい報告書は、都留先生の編集により1959年に刊行されているほか『教育研究』の第6号の所報欄にプログラムと「評価と反省」が載っています。）

都留先生は1966年（昭和41年）教授になられるとともに、教育研究所長と教育学科長を兼任されました。そしてそれ以来23年間、教育研究所と教育学科心理学研究室、さらに大学院教育学研究科の要として、またICUカウンセリングセンターの初代チーフ・カウンセラーとして「ICUに都留教授あり」といわれる存在でありました。さらに学内の宗教活動にも絶えず力を

尽されました。

都留先生の御略歴と主要研究業績や学外における諸活動については別に掲げました。私はここで個人的な思い出を二、三述べたいと思います。

その一つは、私がICUのキャンパスで二度目のアメリカ留学から帰られたばかりの都留先生に初めてお目にかかった時のことです。私より四つ年上の、英語に堪能な「博士」だということでもかなり緊張していた私の前に、「やあ、都留です」といいながら手をさしのべてこられた都留先生は、きわめてスカットした容姿、風貌の持主で、ホッとした記憶があります。「先輩」というよりは「兄貴」という気分で接することができ、その後は、ほとんど緊張をおぼえることなくつきあわせていただきました。

二番目は、たしか1971年11月に、それまで都留先生が主任講座をしておられたフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学の日本研究講座に私がそのあとを受けて着任した時のことです。ふつうならば帰国されたのちに事務引継ぎをするところを、わざわざ滞在を延ばされて、現地で事務引継ぎをして下さり、現地の有力な方々やICUの卒業生に私たち夫婦を紹介して下さい、やら、住んでおられたアパートや使っておられた車や、雇っておられた運転手まで自ら受渡して下さいました。未知の土地で短期間とはいえ新しい仕事につこうとしている者に、それこそ「カルチュア・ショック」を柔げるための気配りとアドバイスは、身に泌みて有難かったことを思い出します。

三番目に、都留先生は一方でいろいろなグループ指導やゲームの経験が豊かでおられましたが、他方一对一の「出会い」や話を大切にしておられ、先生を訪ねる学生や学外者に対しても「ひと中心」で接してこられました。組織の中でバリバリ仕事をなさるよりも、自分ひとりでもできること、自分としてやりたいことを大切にしておられました。私に対しても時折、ごくしんみりとICU心理学研究室の現状と将来について御自身の心配を語り、また、私の協力を求められたことがありました。(河口湖のボートにのって語り合った時のことなどが思い出されます。)

今になってみると、そうした都留先生の御心配や御期待に応えることなく、

かえって失望を大きくしてしまったのではないかと申し訳なく思っています。

先生が再びICUで教鞭をとられるという望みはかなわないにしても、今後も暖く教育研究所と我々所員の一人一人を見守っていただきたいと思えます。都留先生御夫妻が天父の御加護のもと、いつまでも御達者で過されますようお祈りいたします（1989. 1. 25）。